

## 高校中途退学者の実情と学び直しの条件 — 中退者のライフヒストリーによる検討 —

三代 陽介

### 1. 中退者の学び直しとは

高等学校生徒の多様化が教育現場で広く理解されるようになった今日、高校生の中途退学については従来の退学抑止に加え、新しいアプローチが登場している。それが中退者の学び直しとその支援である。しかし、中退者自身の判断に焦点をあてた学び直しの研究は少なく、その実態の解明が求められている。

高校中退問題は1980年代には一定の注目を集めたものの、社会問題としては扱われていなかった。しかし2000年代に入り、若者の生きづらさに関心が高まると大きな問題と見なされるようになった。この状況をうけ、本論文では、高校に入学した者が、いったん中退したものの、再び高校に復帰することが可能になる条件を明らかにしようと試みた。学び直しを選んだ中退者のライフヒストリー分析により、中退前から中退後までの体験や他者との交流を調査した。その結果、学び直しに至るプロセスには、教育制度改革とは異なる次元での障壁があること、さらにその障壁を越える上で、学び直しについて相談できる他者の支援が重要な役割を果たすことが示唆された。これまでは、高校中退そのものが問題視されてきたが、生徒自身が積極的に進路を修正しようとする姿勢に他者という社会的な条件が加われば、中退後の学び直しは可能であると考えられる。

### 2. 高校中退に関する既存研究の整理と本稿の課題

#### 2-1 高校中退に対する認識と政策的対応

2019年の高校進学率（通信制、特別支援学校高等部含む）は98.8%である。中学新規学卒者のほとんどは高等学校の進学を選択するようになった。すなわち高校段階までは各自の学力に応じて学ぶことができる教育機会の拡大を実現してきた。だが、他方では高校を中退する者は例年5万人程度確認されている。ところで高校中退はこれまでどのような事柄として捉えられてきたのであろうか。今日のように中学卒業者のほぼ全員が進学している状況では、高校教育を受けることは社会的には準義務的なものとなっており、中退により教育の機会を損失することは不利益を伴うという考え方が一般的だといえる。極端ではあるが戦前、旧制中学校や高等女学校への進学が特定範囲の人々に留まっていた時代は進学への関心は勿論、社会的にも中退を問題として扱われることすらなかった。中退者へ抱くイメージを実際に社会的に明確に示すことは簡単では無いが、手掛かりの一つとして新聞の見出しを見てみたい<sup>i</sup>。朝日新聞記事検索（聞蔵Ⅱ）にて高校中退を検索すると、1957年3月4日夕刊では「一家7人殺して放火…高校中退の長男…」といった見出しが確認できる<sup>ii</sup>。続く見出しからも中退の語りは問題行動や不利益を感じさせる見出しの記事が多い。その後、新たな動きとして高校中退の抑止の為に、中学校教員らのアフターケア（1983.11.29朝刊）や、大学資格検定（大検）の合格者

の6割が高校中退者で大学へ新たな道筋（1985.11.01朝刊）となっていることを紹介する見出しが確認されるようになる。中退者の受け皿の一つである大検志願者については1万9千人を越し、7割が高校中退者であると文部省調査で明らかとなった（1991.07.23朝刊）。

高校中退は1970年代半ばに高校への進学率が9割を超えるようになると、極限られた人々の話ではなく、誰もが経験し得る出来事になったといえる。だが、不本意入学の増加や輪切り教育の弊害として、退学者自身の問題よりも、むしろ教育問題の一つとして扱われたようである。1980年代には文部省による追跡調査や北星学園余市高校が「積極的に中退者受け入れます<sup>iii</sup>」と宣言し受け入れを推進するなど新たな動きが見られるも、1990年代になると高校中退者は12万人となり、退学者の4割が進路変更を理由としている（1992.01.15朝刊）。文部科学省が本格的に高校中退に関する調査を始めたのは1982年度からである。高校中退の動向は人数としては1990年の123,529人が最も多く、以降は緩やかな減少を見せている。調査上の人数は少子化のため年々減少しているとはいえ、割合的には相対的に減少していないといえる。また、スクールカウンセラーやソーシャルワーカーの増員といった政策的対策をするも近年の中退率は横ばい状況にある（表1）。

表1 中退者数及び中退率の推移

年	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
中退者(人)	106,041	111,531	109,160	114,834	113,938	113,357	116,617	123,069	123,529	112,933	101,194	94,065	96,401	98,179	112,150	111,491	111,372
中退率(%)	2.3	2.4	2.2	2.2	2.2	2.1	2.1	2.2	2.2	2.1	1.9	1.9	2.0	2.1	2.5	2.6	2.6
年	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
中退者(人)	106,578	109,146	104,894	89,409	81,799	77,897	76,693	77,027	72,854	66,243	56,947	55,415	53,869	51,781	59,923	53,403	49,263
中退率(%)	2.5	2.6	2.6	2.3	2.2	2.1	2.1	2.2	2.1	2.0	1.7	1.6	1.6	1.5	1.7	1.5	1.4

出所：文部科学省（2014）児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（2020年12月20日取得：[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/01/04/1412082-26.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/01/04/1412082-26.pdf)）。

表2は直近である2018年度の中退者調査の結果である。中退者数は48,594人である（中退率1.4%）。内訳で見ると、国立42人（中退率0.4%）、公立28,513人（中退率1.3%）、私立20,039人（中退率1.7%）となる。中退率については、心理学者の小栗（2014）は「定時制高校に限ると中退率は11.4%にまで上昇し、さらに定時制高校1年生に限ると21.6%と、いわゆる教育困難高校における中退率の問題は深刻な状況にある」と訴えている（小栗2014：55）。その上で、従来の高校中退に関する研究は、中退の原因や中退者の特性に焦点を当てた研究が多く、予防的な視点からの研究が乏しいことを指摘し、その必要性を主張している。また、退学発生の原因分類としては「(A) 学業不振」「(B) 学校生活・学業不適応」「(C) 進路変更」「(D) 病気、怪我等」「(E) 経済的理由」「(F) 家庭の事情」「(G) 問題行動」「(H) その他」となっており、主たる原因をみると、(C) 35.3%と(B) 34.2%が半数を占めており問題行動で退学した生徒は(G) 3.8%にすぎない。ただし、この文部科学省の実施する高等学校中途退学者調査については「必ずしも実際に高校で起きている中途退学の実態を正確に表しているとは言えない」（乾2010:25）といった指摘もあり、同調査については、文部科学省の配布する調査票に、各学校の担当者が記入するものであり、抽出される退学の理由は、担当教師の判断によるものであると危ぶまれる側面もある（杉山2011：1）。

同じく杉山（2011）は、政策的な対応に対し行政の中退に対する考え方の変化を見出している。具体的には、高校卒業試験＝旧大学受験資格検定制（現在は高等学校卒業程度認定試験<sup>iv</sup>）を強化し

ていく方針や、2000年度から出題問題も基礎的なものとなり合格ラインの引き下げをしたこと。年1回の実施を複数にしたことなどは、行政の高校中退対策問題に対する方向転換であると述べている。併せて中退者に対して、中退から脱出するための制度的なサポートとして、単位制高校の整備や定時制・通信制（以下、定通制）教育を充実させるべきだといった中央教育審議会答申（1991）などに対し、「中退者を自己責任という観点から把握しようとする行政の態度が伺えるとし、生徒自身が自らの人生を真剣に見つめ、積極的に進路を修正しようとするなら、問題視するには当たらないという考えが根底にあるのではないか」といった指摘をしている（杉山 2011：5）<sup>v</sup>。

端的に言えば、退学問題への政策対応としては、中退抑止に加えて、他の学校への転・編入学などの積極的な進路変更（学び直し）について、支援をしていく必要性を示している。その受け皿のひとつとして期待されるのが定通制の高校である<sup>vi</sup>。表3は、2013年から2015年における高校中退者の課程別の内訳である。比較参考の為に退学者が最も多いとされる1990年も併記した<sup>vii</sup>。中途退学率は、全日制普通科0.8%、専門学科1.1%、総合学科1.3%であるのに対して、定時制10%、通信制5.5%となり、全日制普通科の退学率は低い。ただ、退学者の多くは全日制高校の生徒であり、退学問題を全日制高校以外の学校生活の問題とみなすことはできないことは明らかである。

表2 2018年度事由別中途退学者

中途退学(事由別)		計(人)	構成比(%)
(A)学業不振		3,771	7.8
(B)学校生活・学業不適応		16,622	34.2
内訳①	もともと高校生活に意欲がない	5,824	12.0
内訳②	授業に興味がない	2,020	4.2
内訳③	人間関係がうまく保てない	3,488	7.2
内訳④	学校の雰囲気合わない	2,511	5.2
内訳⑤	その他	2,779	5.7
(C)進路変更		17,115	35.3
内訳①	別の高校へ入学を希望	7,764	16.0
内訳②	専修・各種学校への入学を希望	615	1.3
内訳③	就職を希望	4,721	9.7
内訳④	高卒程度認定試験受験を希望	1,580	3.3
内訳⑤	その他	2,475	5.1
(D)病気、けが、死亡		2,107	4.3
(E)経済的理由		988	2.0
(F)家庭の事情		2,054	4.2
(G)問題行動等		1,826	3.8
(H)その他の理由		4,071	8.4
【中途退学者合計】		48,594	100

出所：文部科学省（2018）児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査<sup>viii</sup>（2020年12月20日取得：[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afiedfile/2019/10/25/1412082-30.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2019/10/25/1412082-30.pdf)）。\*（A）～（H）の区分は筆者が便宜上記載

表3 高等学校中途退学者数（率）

年	①全日制普通科		②全日制専門学科		③全日制総合学科		④定時制		⑤通信制		①～⑤合計 在学者数 (人)
	中退者数 (人)	中退率 (%)	中退者数 (人)	中退率 (%)	中退者数 (人)	中退率 (%)	中退者数 (人)	中退率 (%)	中退者数 (人)	中退率 (%)	
1990	60,887	1.5	39,564	2.8	—	—	23,078	15.8	—	—	123,529
2013	23,924	1.0	11,389	1.6	2,584	1.6	12,240	11.5	9,786	5.3	59,923
2014	21,260	0.9	9,248	1.3	2,219	1.4	11,319	11.1	9,345	5.2	53,391
2015	19,650	0.8	8,035	1.1	2,101	1.3	9,769	10.0	9,708	5.5	49,263

出所：文部科学省（2016）児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（2020年12月20日取得：[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afiedfile/2019/01/10/1412082-28.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2019/01/10/1412082-28.pdf)）。

中退者の学び直しの場合として期待される、定通制高校であるが、一方では抱える課題も大きい。特に通信制高校では高校卒業後にどのような進路を歩んでいくのかといった課題が残る。具体的には表4に示すように、全日制高校の4.7%に対して通信制高校卒業生の、39.6%である約半数が就職先も進学先も定まらないままに社会に輩出されている実情がある。現代日本では中退者のセカンドチャンスの場合として定通制高校の果たす功績は見られるも、卒業時の出口問題については喫緊の課題であるように見られる。本稿では高校中退後、再度の学び直しがどのように可能になったかを扱うものであり、高校卒業時の出口問題については改めて別稿で詳細に分析をしたい<sup>14</sup>。

表4 高等学校卒業後の状況調査

進路先	全日・定時制(人)	割合(%)	通信制(人)	割合(%)
大学等	585,184	54.7	9,243	17.7
専修学校	230,086	21.5	11,547	22.1
職業能力開発	6,360	0.6	515	1
就職者	197,413	18.4	10,247	19.6
それ以外	50,525	4.7	20,714	39.6
卒業生合計	1,069,568	100	52,266	100

出所：文部科学省（2017）学校基本調査より作成

（2020年12月20日取得：<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400001&tstat=000001011528>）。

では、中退現象はどの時期から問題視されるようになったのであろうか。教育学者の松本（1992：99-102）は、中退者の増加は1970年代後半から問題視されるようになったと分類している。松本によると、高校中退者問題には、3つの時期があると考えている。要約すると、第1は、1948年から1960年代初頭までの時期であり、退学者の約六割は、定時制に在学し主な中退理由は経済的なものである<sup>15</sup>。1948年の新制高校発足から、3年後である1951年にも、中退者は13万人を越えていた。第2は、1960年代初頭から1970年代初頭までの時期である。この時期は、定時制課程の生徒数は減少する。よって、中退者数は全日制の傾向を反映するものとなった。この時期になると、中退者の経済的問題は減少し、退学者の数の増加が問題となった。第3は、1970年初頭から1992年までの時期である。この時期になると、中学卒業者の就職率は低く、定時制中退者の経済的理由は少ない（4.5%）。中退者問題の時期区分からは、経済的理由による退学から別の理由による退学が増えていったことが確認でき1970年代に入ってから、定時制については本来目的としていた機能とは違い、別の機能をもつことになった<sup>16</sup>。その後2000年代後半以降になると、数の上では中退者は減少し始め、ピーク時の3割程度になり、中退率も半分以下となった。ここには高校教育改革により多様な学びを後押しした成果はあるも、最も役割を果たしているのは2000年代から急速拡大した私立通信制高校が受け皿として機能するようになったと考えられる。

乾（2012）は、高校中退という問題は1980年代に一定の注目を受けたものの社会的課題として扱われなかったが、2000年代では若者全体を巡る困難が社会問題となり若者支援の必要性が次第に認知されるようになったとし、その中でも特に高校中退者はリスクを抱える可能性のあるグループの一



つとして注目されるに至ったと位置づけている。また、中退者の職業教育の機会はほぼ絶たれていると指摘し、中退者が職業教育を望む場合は、主に全日制の専門学科に1年から入学するか、高認試験を経て専門学校に入るかのいずれかであると危惧している。

これまで高校は卒業すると同時に就職させることで、新規学卒一括採用という慣行により、生徒を社会へ移行することを主体的に関与してきた。この仕組みは、「学校生活を頑張ることで、生徒自身に安定した就職先を確保できるのではないか」といった期待をさせ、目標を持った高校生活を過ごさせることができる利点がある。また、学校側にも生徒に対して問題行動や退学を抑止する一種のブレーキの様な機能があったといえる。だが、退学により就労機会の喪失も危ぶまれる。一度、中退をして高校からの支援網から抜け落ちるとキャリアの修復には時間がかかるため、より親密な手厚い支援が必要となる。政策的にも動きを見せ、経済的に不安定な若者への対策は、国全体で取り組むべき課題となり、2010年4月1日に「子ども・若者育成支援法」を施行し「困難を有する子ども・若者やその家族を支援する取り組み」を掲げ支援の必要性を示した。また、内閣府では、2010年に高校中退者の生活状況や意識、必要としている支援を把握するため、文部科学省の協力を得て「若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）」として全国調査を実施した。調査の概要としては2010年7月から9月にかけて郵送送付・郵送回収によるアンケート調査の方法により実施された。調査対象は高校中退学後概ね2年以内の者とし、協力を得られた都道府県及び政令市にある公立高校から、中退した2651人に対して調査票を送付し、1176人から有効回答を得た（有効回答率44.4%）。調査結果では中退した理由について、進路変更や学校生活等不適應の割合が多く、具体的には「欠席、欠時により進級できそうにない」（54.9%）、「校則、校風への不満」（52%）、「勉強がわからない」（48.6%）、「対人関係」（46.3%）といった理由は半数以上を占めていた。だが、一方では中退を後悔している者は（23.7%）に留まる反面、中退後に高卒資格は必要だと78.4%が考えており、中退を後悔していないと考える者のうち、67.5%は高卒資格の必要性を考えている。中途退学したことに対する後悔の低さと、高卒資格は必要だという認識の高さという一見相反する感情を抱えている。

次に高校中退後にしていることとしては、「働いている」56.2%、「在学中」30.8%となっており、雇用の内訳は、「フリーター・パート等」77.2%で、「正規職員」は17.1%と低い割合である。将来の展望について、3年後に「正規職員になりたい」（35.9%）が最も多く、「どうして良いかわからない」（11.5%）将来像が描けていない実情があり、「将来への不安がある」69.6%と、半数以上の者が不安感を抱えている。このように中退者は、「進路や生活など相談できる人」66.6%、「生活や就学の為の経済的補助」63.1%といった支援の必要性を感じている。そこで、厚生労働省では、関係諸機関と連携して「地域若者ステーション」を設置し専門的な相談や支援プログラムを実施している。2010年度からは、「高校中退者アウトリーチ事業」を展開し進路の決まらない高等学校中退者の自宅等へ訪問支援を実施することとした。このように学校教育から地域若者ステーション等への導きを行い、切れ目ない支援の展開を目指した。更に、2014年には「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が施行され、大綱では「高校中退者等について、学校がハローワーク等に対し高校中退者情報を共有する等により、就労支援や復学・就学のための情報提供を図る」といった方針が示された。つまり、関係諸機関と連携しチームアプローチ（個から組織）による介入支援を推進していくこととなった。しかし、中退者が社会的弱者に至る可能性が高いと危ぶまれる反面、実際には中退者の実態把握は限界があり明らかにされているとは言い難い。

## 2-2 高校中退をめぐる問題の所存と本稿の課題

高校中退が社会的課題として発展した背景として、その後の個人のキャリアに長期に及んで影響を及ぼすことと、就労機会を失うことなどの社会的損失が結び付くと考えられたことにある。しかし、なぜ学び直しをするのかその背景にある原因は漠然としている。魅力ある高校づくりを目指し、独自のカリキュラムや、入試形態も多様になるなか、中学を卒業し最初に入學する高校への動機や、中退理由、その後の再入學の関係は明らかではない。高校中退の要因として中学時代の経験や個別の背景も影響しており、中退が生じる前の情報から縦断的な研究を行う必要がある。

これまで、高校中退問題に関しては中退に至るメカニズムの解明が課題とされ、どのような生徒が中退するのか、あるいは退學意思を有しているのかという問いが立てられた研究がされてきた（片山2008）。一方、古賀（2004）では、高校中退を退學者の問題として「個人化」することにより、退學した生徒らを取り巻く教育や社会の構造を見落としてきたことを指摘した。つまり、常識として語られる中退の病理現象と現実の中退者たちの退學を正当化する認識のズレを指摘することが十分でなかった。前者の研究は高校中退をどのように捉えて対処するかという問題意識に基づくものであり、後者の研究は中退問題の重層的な理解や異なる解釈を立ち上げていくことを主張し、決して人生の危機や教育の失敗とは言い切れない中退問題が多数存在し、学校不適応という枠組みからでない退學への理解をしていく必要を主張している。だが、高校中退者への追跡的な継続調査は実際には難しい。これに対して本稿では、高校入學前から退學した後、どのような経験や他者との関わり合いをしてきたかを追跡的に調査している。かつては社会問題、教育問題として見られていた高校中退を、当事者自身の言葉で語られたものである。すくない事例ではあるが、日本の高校教育や若者支援の変容をもたらす契機であることについて検討する。

## 3. データーの説明と方法

### 3-1 調査地選定の理由と調査方法

高校退學後の選択肢として、通常考えられる選択肢として、以下の様に分類できる（表5）。このうち、行政等が考える高校への行き直し支援としてはNo.1、No.2となる。就労しながら、通信制高校や定時制高校に通う場合は、No.3の就労支援も必要となる。だが、仮説としては退學直後には高校生活自体を否定的にとらえがちであり、いずれの選択であっても支援者を見つけることも話すことも難しいのではないだろうか。高校中退問題に対しては、地域的に多少の誤差があるが、全国的に共通する課題であると考えられる。本稿で取り上げるのは、九州のX県である。X県を事例に用いた理由と目的は先ず、2014年の全国の平均中途退學率1.5%に対し、X県は1.6%と近く、主たる中退理由も全国平均の学校生活・学業不適応（34.9%）、進路変更（34.8%）に対し、X県は学校生活・学業不適応（31.9%）、進路変更（41.6%）と同じような割合であった。次に、筆者自身が実践活動を通じて築いた交流網があり、多様な聞き取りの実施が可能のため、X県の若者を調査の対象とした。

本論文で用いる事例4名である。次節で詳述するが、いずれも中学卒業直後に高校へ進學する。しかし、何かしらの躓きによって、退學や挫折に至った生徒である。だが、その後、再度高校へ行き直すことになる。事例No.4については、退學後の学び直しではないものの、定時制高校での躓きを経験した後にもなんとか継続し学び続ける貴重な事例と考え今回用いることとした（表6）。調査は各対

象者に聞き取りを行う形で実施し、分析手法としてはライフヒストリー分析を用いた。対象者の特定を避けるため、生年表記とし調査時期の詳細は伏せてある。また、記述では便宜上、(1) 幼少期から中学卒業まで、(2) 最初の高校入学から退学まで、(3) 高校中退後と、再度の高校入学に至るまで、といった3区分に分けて生活状況などを提示した。

表5 高校中退後の選択肢

No.	選択	内容
1	転入	現在、在籍している学校から、他の学校へ転校する
2	編入	一度学校を退学し、単位の引継ぎを伴い、違う学校へ入り直す
3	就労	アルバイトを含め、賃金を得るために労働を行う
4	その他	病気や、特別な理由によって、1～3 いずれにも該当しない

No.1のAは、私立の全日制高校へスポーツ進学するが退部し、徐々に高校へ通う意味を見出せなくなり、高校を退学。その後、就労しながら私立の広域性通信制高校に入学する。No.2のBは、県立の全日制高校へ進学。トラブルにより退寮となる。実質的に通学することが困難となり退学となる。その後、県立3部制高校の秋入試を受験し入学。在学中に、交際相手が妊娠する。出産に伴い生活環境が大きく変化する。一時は退学も考えたが、通信課程へ移籍して、高校生活を継続することが可能となった。No.3のCは、私立の全日制へ部活の特待生として進学する。夏休み明けには、退学。その後、日雇いの仕事をするようになる。18歳になった年に県立の通信制へ入学する。通信制高校のシステム自体が理解できず留年となる。退学を考えるも、2度目の1年生を開始して以降は、3年間で高校を卒業することになる。No.4のDは、県立の定時制(夜間)へ進学する。中学校では学校に馴染めず登校はあまりしていない。中学3年生の当初は就労を考えていたが、定時制高校一本で受験し進学する。入学後は、仕事と学業の両立が難しく、退学を考えるようになった。だが、踏みとどまり引き続き高校生活を続けることになり、4年間で卒業することになる。

表6 本稿で用いる事例(調査対象者属性)

No.	名前	性別	生年	高校種別	学科	結果	後の高校選択
1	A	男	1999	私立全日	普通	退学	私立広域性通信へ1年から入学
2	B	男	1997	県立全日	専門	退学	県立3部制へ1年から入学、途中通信課程へ転科
3	C	男	1986	私立全日	専門	退学	県立通信制へ1年から入学
4	D	男	1992	県立定時	普通	挫折	再度、同一の定時制高校を継続

### 3-2 調査結果

#### 2-1 Aの事例(No.1)

##### (1) 幼少期から中学卒業まで

Aは、X県の中心部にて幼少期を過ごす。両親は離婚しており、母親に育てられる。姉と妹との4人で生活をする。小学生の頃から、サッカーをしていた。高学年になると県内の選抜選手となる。中

学生の頃になると、周囲から一目置かれる存在になっていた。先輩からは、頻繁に喧嘩の応援を求められていた。しかし、興味がなかったで行ったことはない。理由は、「小学生の頃、喧嘩の謝罪に行ったとき、手土産を持ってペコペコ謝罪する母の姿を見るのが嫌だった」からだ。手土産を買ったことで、当分は食事が質素になることが続いた。中学3年生の頃は、自由になるお金が欲しかったので、就労を考えていた。先生からは、「奨学金を利用してでも、高校に行ったほうがよい」と勧められていたが、「借金を作るみたいで嫌だった」そうだが、12月頃に担任から突然呼ばれた。「高校のサッカー部の監督が会ってみたい」という内容であった。後日、会ってみると驚いたことに、小学生の頃のサッカーをしていた時によく見ていた人であった。この時に初めて知ることになるが、地元の高校の先生だった。高校の先生からは、「高校へスポーツ特待生で来てみないか」といった誘いだった。授業料、寮費も無料という条件であった。その日の夜に、母親に伝えると「自分で決めなさい」と言われた。翌日、中学の担任に申し出を受ける方向で話をした。

## (2) 最初の高校入学と退学まで

高校の制服は部活の先生がOBから譲り受け、入学するまでに大きなお金は必要なかった。特に、嬉しかったのは寮の食事である。大皿に沢山のオカズが盛られ、自宅と比べると物凄く贅沢な食事であった。高校の授業も面白く、好きなサッカーも出来て、本当に恵まれていたと感じていた。しかし、友人たちとの関係では違和感があった。友人らは一回の遊びで、¥1,000～¥2,000を使っていたが「自分には、そんなお金がない」という気持ちから最初の時期は奢って貰っていたが、徐々に関係性が窮屈になっていった。そのうち、遊びに誘われるもの嫌になり、最後は部活を辞めることにした。だが、退部したら寮から出ていく必要がある。学校は自宅から離れており、JRで通うしか方法はない。当初はJRで通っていたが、毎日の交通費を考えていくと、「高校へ通う意味があるのか」と考え出した。授業にも興味は無くなっていた。そして、「自由になるお金が欲しい」という思いが強くなり、高校1年の10月に高校を退学することとなった。

## (3) 高校中退後と、再度の高校入学に至るまで〈本人の語り〉

高校を辞めてからは、仕事を探した。ハローワークで、仕事の紹介をしてけると聞いたので行った。色々な会社へ面接には行くが、「運転免許書が必要だ」とかいて雇ってくれない。その後、町に置いてある無料情報誌に載ってある会社に電話をして、雇ってもらった。雇用の条件は寮に入ることだった。親に負担をかけたくないと考えていたので、好条件であった。実際に働き始めると、仕事自体は大変であった。「お金になる」と考えると、頑張ることが出来た。だが、初めての給料日は、予想していた金額よりも、少ない給料が封筒に入っていた。皮手袋代、寮費、食費、送迎費といった、金額が引かれていた。直接、社長に聞いてみると「当たり前のこと」「タダで寮に住める訳がない」と言われた。この時、よく聞くブラック企業っていうのかなと思った。取りあえずは我慢して働きに行ったが、不思議な給料の天引きは続く。我慢が出来なくなり、辞めたい旨を社長に申し出た。すると「辞められたら困る」「損害賠償をしてもらう必要がある」と言われ、正直怖かった。

丁度、仕事を辞めたいけど辞められないと悩んでいたころ、友人から連絡があった。友人も「高校を辞めていた。働くところを紹介してほしい」といった内容であった。そこで、自分は社長に「友人を紹介しますので、自分は退職してもよいですか」と聞くと、あっさりと退職の許可を貰った。今、思えば自分が友人を売ったみたいな形になったかも知れない。友人とはもう連絡を取っていない。仕事を辞め、どうしようか考えていて久しぶりに中学に遊びに行った。昔の先生がいた。今までの自分



の経験を話すと先生が、広域性の通信制高校を紹介してくれた。学費が極めて低額であること。レポートを軸としてスクーリングは、半期に一回程度であることを教えてくれた。学力の不安があったが「お前ぐらいならできる」といった先生の励ましの声を信じ4月から通ってみようと考えた。

あともう一つは、仕事の問題があった。自分が仕事を探しているといった情報を、サッカーの監督が聞きつけ職場を紹介してくれた。間に、監督が入ってくれて、学校に通うといったことも了承しての雇用になる。仕事は、土木工事を中心に行う。今まで別会社での経験があったので、新たな職場からは「お前若いのに良く知っているな」と言われ嬉しかった。今は、県外の出張とかも行き、給料も同年代に比べ多く貰っていると思う。一方で、不安もある。入学した広域性の通信制高校では、あまりにも面接授業が少なく不安になるほどだ。毎月のレポートは期限を守って提出しているが、こんな緩い感じで良いのかなって思う。「社会体験こそが大事な学習である」と高校の先生が言ってくれるが正直不安になる。たまにあるスクーリングは、授業よりも人生相談に行っている感じがする。高校を1年の途中で辞めていたので、編入はできなかった。1年生からやり直したけれど、今は2年生に進級することが出来た。授業の一環で、幼稚園に行ったときに「人に関わる仕事もいいな」と思った。大学にも、通信や夜間課程があると聞いた。笑われるかもしれないけど、将来的にお金の余裕が出来たら、大学に行ってみたいという気持ちもある。自分がどこまで出来るか挑戦してみたい。仕事をしながらレポートを仕上げるのは大変だけど今できることをやっていくしかないと考えている。

## 2-2 Bの事例 (No.2)

### (1) 幼少期から中学卒業まで

Bは、大規模な区画整理が行われた地域で育つ。大学があることもあって、借家が多くあった。土着よりも来住者が大半を占める。小学校で大きな問題を起こすことなく、中学ではバスケット部に所属していた。進路先は勉強をしなくても良いと考え、県立の農業高校を考え進学をした。

### (2) 最初の高校入学と退学まで

高校へ入学したが、勉強はあまりしなかったようである。寮に入って生活することになったが、田舎なので遊び場所がなく時間を持て余していた。放課後、「空き地にたむろしている」と通報をされ警察に注意をされ喫煙が発覚し寮の人から嚴重な説教を受けることとなる。結果的には先生の言い方に苛立ち反抗し「そんなにいうなら退寮する」と啖呵をきって飛び出した。JRなどの公共交通で通えば良いと考えていたが、次第に面倒になって、1年生の6月には退学することとなった。

### (3) 高校中退後と、再度の高校入学に至るまで《本人の語り》

退学当初、目的もなかった。とりあえずバイトを探してみたが、良いのがない。高校生の方が良いなど漠然と思えた。久しぶりに中学校に遊びに行った。高校を辞めた事を伝えると、中学の先生から県立3部制高校の紹介を受けた。先生が、入試に向けて独自に通信レッスンをしてくれることになった。入試には自分一人で向かった。現地には自分が中学時代ちょっかいを出していた先生が待っていた。「高校を受験すると聞いた」「何も助けてあげられないが、試験が終わるまで会場で待機する」「頑張れ」と言ってくれた。この時の嬉しさは今でも覚えている。

3部制の高校に合格し秋から再度の高校生となった。3部制には色々な人がいる。年齢の差が物凄いい。校則がないためか、学校は随分派手な格好が目立つ。自分のアルバイトを調整しながら、高校生

活と二つの生活を満喫できた。高校生活もスムーズにいく中で、友人らと夏祭りに行った。自分より年下の女性と出会った。意気投合し、付き合うことになり妊娠をする。交際相手は産みたいという。自分は自信も金もない。悩んでいる内に、お腹の子供はどんどん大きくなる。気持ちばかりがあせってくる。交際相手の父親に会いにいった。殺される思いだった。「子供を育てるのに銭は必要」「俺の家に住め。一緒に働け」と言われた。交際相手の父親は自営業（土木）一緒に住むことで経済的負担を減らし、お金を残させたい思いがあったようだ。自分は、他の選択肢もなく「わかりました」しか言えなかった。残る課題は高校を継続するか否かであった。退学は望んでいない。高校の先生へ相談に行こうとしたが話せる関係の職員がいない。そこで、中学校の先生に連絡をとり全てを相談した。すると、「本来なら自分の口で高校の先生に相談すること」「子供の件があるので緊急事態」といって、先生が高校と話し合っただけで事情を伝えてくれた。結果、通信制への転科をすることが可能となった。今は、仕事と高校生活の2重の生活をしている。思えば、随分長い高校生活をしている気がする。「生まれてくる子供に中卒でなくて、せめて高卒だ」といいたい。卒業できるかどうか分からないが、もう少し頑張ってみたいと考えている。

## 2-3 Cの事例 (No.3)

### (1) 幼少期から中学卒業まで

Cは、小学生の頃から自転車競技や格闘技をする。父親が事業をしていたこともあり、裕福な生活であった。だが、中学になる頃に、事業に失敗し蒸発する。戸建てから、市営の団地へ転居する。団地内では小学生から、上は成人までの遊び集団があった。違和感はあったが、次第に仲間として受け入れられることに喜びを覚え交流が広がる。中学では好きなスポーツを続けていたこともあって、高校側からスポーツ特待生の誘いを受けることになる。勉強をすることも嫌だったのと、授業料免除は興味があり進学する。

### (2) 最初の高校入学と退学まで

高校に入学して特に問題もなく生活していたが、夏休みの時期には夜遊びや単車といった遊びに没頭することとなる。繁華街で遊んでいたのを、高校の先生に発見される。後日、呼び出しに応じた母親と自分に対し、先生が見下した態度をしたので衝突し、高校1年の9月に退学をする。

### (3) 高校中退後と、再度の高校入学に至るまで《本人の語り》

高校を辞めてからは、お金を稼ぐために働くことを考えていた。団地内の年長者から仕事の斡旋を受け、日雇いの仕事を行う。雨の時など仕事がひと月とかない事もあった。そんな時は、先輩らと温泉に行くことや、車でウロウロすることで時間を消費していた。2年間ほどそういった生活をしていった。同級生は高校卒業後の話をしている。自分だけ何か置いて行かれているような感じがあった。そうした時に、中学の時に教育実習に来ていた先生と会う。先生は自分の事を覚えていてくれた。元実習生との連絡先を交換し、以後頻繁な交流が始まる。元実習生に今自分のモヤモヤした気持ちを伝えた。そうすると金銭的な負担も少ない通信制高校への入学を進められた。正直、バツしなかったけど何か新しいことが起きると思って入学を決意した。入学は書類の提出のみであった。入学してからはレポート学習が中心となる。月に2回程度、日曜日に学校へ面接授業を受けに行く形であった。入学してから良く分からないまま時間が過ぎた。履修すべき科目を履修していなかった。あまり、細かな学習指導はなかった。レポートの提出もいい加減になって幽霊学生になった。やはり自分には高校

生は無理だと思い退学をしようと考えた。

元実習生と一緒に温泉に行っている時に、自分が高校を辞めようと相談すると、「じゃあ俺と一緒に高校生になるわ」といって本当に4月から通信高校に入学し同級生になった。元実習生は面接授業がある時は迎えに来て、一緒に登校する形をとった。半分無理やり部活に入れられた。自分とは何ら縁のない陸上部であった。競技は砲丸投げ。その後、全国定時制通信制高校体育大会に出場することになった。卒業までの3年間で3回東京に行けた。学校に行くことに対し、何の抵抗感を持つこともなく、むしろ楽しい時間であった。高校を卒業する時の進路選択は、進学を決意した。今、思うと元実習生は何の為に、再度の高校生になったか不思議である。今なお交流はあるが、未だに理解が出来ない。

## 2-4 Dの事例 (No.4)

### (1) 幼少期から中学卒業まで

DはX県にて生まれる。父親は関西出身の期間工員をしていた。母親はX県出身で仕事は保険勧誘員をしていた。Dには兄がいる。兄は、現在漆喰工をしている。後に両親は離婚し父親の暮らす関西へ転居した。Dは、小学校1年生から6年生の夏まで父親と生活する。父親は不在が多かった。生活するためのお金を封筒に入れておいて、その中から食事や必要な物品を購入するといった具合であった。Dの生活していた地区には、朝方になると日雇いの仕事を紹介してくれるシステムがあった。高学年になると、年齢と名前を誤魔化して週に2回程は日銭を稼ぐことしていた。父親が帰宅する間隔が次第に長くなって連絡がつかない時期が続いた。その後、小学校6年の夏にX県の母親の元へ生活の場を移すことになった。小学校には知人が皆無であったこと、学校自体に興味がなかったことも重なって登校することは少なかった。その後、中学は地元の公立に入学した。昼前に中学校に行き、給食が終わると帰宅するような生活をしていた。母親は基本的に、指導や助言をすることはなかった。当時、Dの在籍していた中学校は、同様の行為をしている児童が複数名いた。だが、給食を食べに行く事すらも面倒になり、学校とは疎遠になっていった。

中学3年になった頃には時折、給食を食べに来ることがあった。理由は二つあった。「新しいA教員が赴任した」と噂を聞いていた事と、空腹を満たす事である。ある日、Dが給食を食べ終え午後の授業時間に校舎で喫煙している所を巡回中のB教員に注意された。Dは「舐められまい」とB教員に詰め寄り胸倉を掴んだ。周囲は同じく授業を抜け出した生徒で囲まれる騒ぎになった。衝突を止めようとA教員が授業を中断し応援にきた。A教員がDとB教員の中に割り込んで入る。緊急回避的にA教員がDをホールドし終息する。双方の出会いはこの時が初めてであった。Dはこれまでの生き方では、人の上下関係を腕力で判断してきた。DはA教員に従い「喫煙をしない、喧嘩をしない」といった約束をした。Dは相変わらず給食前に登校するスタイルは変わらなかったが、給食後の時間はA教員と会話をするが多くなった。「中学校卒業後は友人の多い関西に戻って、知人の伝手を頼って就職しよう思う」といった気持ちも語れるように変化していた。

だがその後、Dは傷害事件に関与することとなる。後輩が隣接校の生徒とトラブルになり、腕力に自身のあったDは「何か退屈を解消するため」と考え後輩の後を追いか勢に行った。最終的には相手方が謝罪を申し出て、ジュースを人数分購入させ舎弟にさせた。しかし、数日後にD宅へ恐喝・傷害の容疑で警察が来た。Dが主犯格扱いとなり、鑑別所へ入所することとなる。鑑別所には時折A

教員や校長が面会に来た。面会の時にDと話し合った上で、A教員の実家の顧問弁護士に付き添い人になってもらうこととなった。その時に、A教員から当面の目標として高校受験を持ち掛けられた。その後審判の結果は、保護観察処分となり鑑別所退所後は、毎日中学校に来るようになった。これまで自由に生活をしていたので、中学校生活はストレスでしかなかったが、学校側もDに対し、個別の学習補充をする意味で別途使用していない教室を開放した。興味深いのはDに感化されてか、他の授業中に徘徊する児童の一部も教室に入ってくるようになった。A教諭との約束であった高校進学も、これまでの生活や学力を踏まえても全日制は難しいと考え夜間定時制への専願で受験をして合格した。

#### (2) 最初の高校入学と挫折体験《本人の語り》

高校に入学すると同時に仕事場の確保が急がれた。しかし、夕方からの授業時間に合う職場を探すことは難しかった。学校からの斡旋でバイトに就くが、金銭面で苦しくて辞める。その後、生活の為に外仕事(土木)に就くが、17時の授業開始には間に合う事が難しく、結果的には高校生活を継続することが難しかった。次第に、高校に対する思いは弱くなって、「仕事を継続し収入を得るほうが良い」と考えるようになった。高校には在籍しているが通学は出来なかった。仕事の方は順調に進んで行ったが、自動車の運転免許を持っていなかったため、現場が限られていたが出来ることを頑張ってきた。決定的に頭に来たのは夏休みになると大学生のアルバイトが入ってきて何も出来ないのに俺よりも給料が高かったことだ。そのことを社長に伝えると「お前は、運転免許が無く、中卒だろ」「不満なら辞めろ」と言われ仕事は辞めた。

#### (3) 高校挫折後と、再度の高校継続に至るまで《本人の語り》

辞職してからは、就職先を探すも確保が難しかった。そこで話しやすいA教諭に相談をしに行った。A教員から平日、7時～15時までの内装屋の仕事を紹介してもらった。また、土日は、引っ越しの手伝いや、地域の草刈といったことなどをA教員と一緒にすることで、小遣いをもらっていた。仕事を変更し学校の授業時間に間に合う事で、学校は何とか継続が出来た。在籍する生徒の多くが仕事をしていない状況にあるなかで、汚れた作業服で教室に来る俺の姿は異様な光景だったと思う。勉強面も正直ついていくのも難しかったが、高校の教員が俺の為に振り仮名付きの個別の教材を作成してくれたりして何とか卒業ができた。卒業してもA教員との個人的な交流は続いている。

## 4. 知見と考察

本稿では、新聞の見出しを手掛かりとして高校中退という事象がどのように描かれてきたかを整理してきた。また、関連政策の変容を踏まえた上で、現状での制度化に学び直しを目指す若者がどのように対応しようとしているかについて検討してきた。各事例を通して得られた知見と考察を以下の3点にまとめたい。

### 4-1 退学時の状況把握の必要性

政策的にも中退者に対し柔軟な対応と進路選択を確保する動きは見られるものの、良好な関係で高校を去るものは少ないようである。退学直後は「何をして良いか分からない」状況の下、不安を抱えながら、新たな選択肢を見つけることになる。当面の収入を得る方法としてA～D共通しているのは、公的な職業紹介を得ることが難しかった。特にDについては定時高校入学時には就労を斡旋す



るも実情に合わず離職し、在学自体も危ぶまれるようになった。本来定時制高校では勤労学生の入学が想定されてきた。だが、今では希少な存在となっているようである。働きながら通学をしていくには、高校と雇用先との、新たな連携づくりが求められよう。また、各事例共通するのは退学した高校と密な連絡をすることは難しく中退者の多くが不安定な状況で社会に入っており、マッチングレベルの改善に力を入れるだけでなく、現実性を持った支援策が期待される。乾（2012）の退学による就労機会の喪失とキャリアの修復の難しさはいずれの事例からも確認された。

#### 4-2 支援者の存在による学び直しの可能性

各事例からは、人生の重要な部分を共有する支援者の存在があったことが、明らかとなった。一般的には、親や兄弟などに悩みや進路の相談などをしていくものの、事例では片親を喪失している場合も少なくなかった。早期に高校を中退した場合は、高校教員らとの関係性は薄く、恒常的な関係を継続していけず、心の支えや安定に及ぶことは難しいようである。各事例では、時間の共有や関係性を少しずつ積み重ね、結果的には頼れる支援者へと発展したようであった。各事例に共通していえるのは、信頼できる他者（大人）に相談できたことにある。また、関係性を中長期的に継続してきたことの効果が大きいようであった。Aは地元のサッカー部の監督との長い関りにより、就労と学び直しを可能とした。Bは交際相手の存在のみならず、交際相手の父親らが支援者として機能することとなった。Cは教育実習生へ悩みを語れることで高校への意欲が高まり一緒に再チャレンジすることとなった。Dは中学時代の特定の教員と関わりを継続することで見守りのような声掛けを受け、高校に留まることができた。このように中長期的に関われる人の存在によって学び直しの可能性は一定程度の効果を見せている。内閣府の「若者の意識に関する調査」で得られた、中退者が求める「進路や生活を相談できる人」の有効性が明らかとなった。すなわち、古賀（2004）が訴えるように、中退は決して人生の危機や教育の失敗とは言い切れない中退問題が多数存在していることも改めて確認され、重要なのは中退問題の重層的な理解や学校不適応の事例という枠組みからだけではない退学への理解が必要となる。

#### 4-3 政策的対応と今後の課題

本稿では、「学び直し」の例として、いったん中退した若者たちの高校への再入学を取り上げ入学へ至る決断から卒業までのプロセスを、ライフヒストリー分析の手法により記述的に明らかにすることを試みた。その結果、学び直しとは、高校を中退した若者が、それぞれの抱える課題や家庭を含む社会的背景と向き合いながら、人生形成をはかるプロセスであること、さらに、そのプロセスには中退者が信頼している他者が関わっていることが明らかになった。政策的にも、退学者に対し高校やハローワークといった関係諸機関が連携し、就労支援などをするといった取組みみられるようになった。これらの取り組みは一定程度評価できる反面、簡単にシステム化をして導入するのは現実には難しい。本稿の事例では支援者のインフォーマルな動きによって、結果的には支援をすることが可能となっていた。すなわち高校を中退し、高校へ再び行き直すために大きな条件の一つは、伴走できる支援者の存在である。その前提となるのが、相互の関係性である。だが、関係性の構築は簡単ではない。重要なのはサポートを受ける側の意図を十分に理解し、主体性に寄り添っていくことである。今後、政策面では高校を中退した者や、生きづらさを感じている若者に対して、現実的な介入・支援の方法を早

急に構築して行く必要がある。本研究の知見は、限られた事例ではあるものの、実態研究がそれほど多くない現状において学び直しへの支援策の検討にとって重要な示唆を含むと考えられる。今後の課題として、親密な他者ともいえる支援者（相談者）の育成をどのようにしていくかにあり、困難を抱える若者へ意図的につないでいくという視点からの検討が不可欠であると思慮される。

## 参考文献

- 阿部彩, 2008, 『子どもの貧困—日本の不公平を考える』岩波書店.
- 青砥恭, 2009, 『ドキュメント高校中退—いま, 貧困がうまれる場所』筑摩書房.
- 乾彰夫, 桑嶋晋平, 原未来, 船山万里子, 三浦芳恵, 宮島基, 山崎恵里菜, 2012, 「高校中退者をめぐる経緯とその後の意識に関する検討—内閣府調査(2010)の再分析—」『教育科学研究(26)』, 25-78.
- 岩田明, 1992, 「高校教育の実態と問題点—教育困難校の場合」門脇厚史・陣内靖彦編
- 小栗貴弘, 2014, 「定時制高校の中途退学予防に関する実践研究—包括的な予防プログラムの開発を目指して—」『心理学研究(10)』, 目白大学, 55-69.
- 片山悠樹, 2008, 「高校中退と新規高卒労働市場—高校生のフリーター容認意識との関連から」『教育社会学研究』83集, 東洋館出版社.
- 金賛渚, 1986, 『追跡高校中退』講談社.
- 古賀正義, 2002, 「中退問題」の構築過程に関する実証的研究『日本教育社会学会大会発表要旨集録(54)』, 194-195.
- 古賀正義, 2004, 「学校化社会のなかの『中退問題』」古賀正義編著『学校のエスノグラフィー—事例研究から見た高校教育の内側』嵯峨野書院.
- 古賀正義, 2015, 「高校中退者の排除と包摂—中退後の進路選択とその要因に関する調査から」, 『教育社会学研究(96)』.
- 小林剛, 1993, 「高校中途退学者の追跡研究」『福井大学文学部紀要第4部教育学科』, 33-51.
- 酒井朗, 林明子, 2012, 「後期近代における高校中退問題の実相と課題—『学校に行かない子供』問題としての分析—」『大妻女子大学家政系研究紀要(48)』67-78.
- 酒井朗, 2013, 「『学校に行かない』子どもの教育権保障をめぐる教育臨床社会学的研究」『平成22-24年度科学研究費補助金研究成果報告書』.
- 杉山雅彦, 2011, 「高等学校中途退学に関する文献研究—研究の動向と今後の課題〔論説〕」.
- 手島純, 2017, 「通信制高校の基礎知識」『通信制高校の全て』彩流社.
- 内閣府, 2011, 『若者の意識に関する調査(高等学校中途退学者の意識に関する調査)報告書』.
- 中村高康, 2014, 「日本社会における間断のない移行の特質と現状」『高校・大学から仕事へのトランジション 変容する能力・アイデンティティと教育』ナカニシヤ出版.
- 北星学園余市高等学校, 1997, 『学校の挑戦—高校中退・不登校生徒を全国から受け入れたこの10年』教育史料出版会.
- 北海道大学高校中退調査チーム, 2010, 「高校中退の軌跡と構造(中間報告)—北海道都市部における32ケースの分析」『公教育システム研究』10号, 1-60.

松本康, 1992, 「高等学校の量的拡大と質的变化」『高等学校の社会史—新制高校の予期せぬ帰結—』東信堂, 71-115.

耳塚寛容明, 2001, 「高卒無業者層の漸増」矢島正見・耳塚編『変わる若者と職業世界—トランジションの社会学—』学文社.

見田宗介, 1963, 「現代における不幸の諸類型 疎外—<日常性>の底にあるもの—」『現代社会学講座Ⅵ』有斐閣.

文部科学省, 2016, 『文部科学白書 2016』文部科学省.

- <sup>i</sup> 見田宗介 (1963) は不幸の諸類型において新聞の身上相談を用いた。理由として「身上相談に投書する人びとは少数である～中略～読者の中には、純粋な好奇心だけから読む人々もある。しかし、自己あるいは周囲のだれそれの直面している、程度の差はあれ同じような状況と意識的・無意識的にかさねあわせて読んでいる読者も多い」と位置付けた (22-23)。本稿で新聞記事の見出しを選んだのはそれが理想的に完璧なものではなく、中退というキーワードがどのような語られ方の変化をしてきたのかを探る手掛かりとして扱うことを試みた。
- <sup>ii</sup> \* 朝日新聞記事検索サービス (聞蔵Ⅱ 1950年～1999年) にて「高校中退」というキーワードで検索すると 81 件の記事が確認できる。その他に「学び直し」「行き直し」でも検索を試みたが、探すことができなかった。2019.07.12 閲覧。

1957.03.04	夕刊	一家7人殺して放火 高校中退の長男 成績悪く神経衰弱_殺人
1967.09.12	夕刊	遊び好きが命とり 高校中退後ぐれた少年_町田市の踊り師匠殺し
1969.09.11	夕刊	孤独・気弱な家出少年 高校中退 職も点々 時に凶暴性むき出し
1972.08.06	朝刊	東大卒・外国語ペラペラ 人材銀行の紹介 高校中退・詐欺シドロン 中小企業採用後詐欺
1975.03.25	朝刊	(5) 高校中退 倒産と 28 人
1977.11.26	朝刊	反応にぶい教育現場「名前知らぬ」共闘逃げ腰 記者の目 高校教育の課題に_暴走族
1981.07.18	朝刊	少年が老夫婦刺殺 高校中退し受験勉強中「ピアノうるさい」_殺人
1983.01.12	朝刊	「輪切り」進学指導徹底 高校中退増に拍車 教研集会報告から
1983.04.26	朝刊	中退増やす“むりやり進学”_教室から
1983.11.29	朝刊	高校中退防止 教え子アフタケア中学の先生たち 大阪・高槻市が市ぐるみ教室のひろば
1984.03.29	朝刊	「大検コース」予備校や塾に次々 高校中退者ら対象_家庭面
1985.04.03	朝刊	高校中退 11 万人超す 58 年度「輪切り」で本意進学_高校
1985.04.04	朝刊	いま「高校」とは何なのか_社説
1985.08.24	朝刊	高校中退者を追跡調査 理由や進路、詳しく 来年度文部省
1985.11.01	朝刊	大学資格検定 高校中退者の合格 6 割超す 大学への“バイパス” 定着
1985.12.19	朝刊	高校中退なお 10 万 9 千人 退学理由「なじめない」が急増 59 年度_高校
1985.12.19	朝刊	(表) 高校中退者の推移_高校
1986.11.01	朝刊	大検 合格者、過去最高に 6 割近くが高校中退者_大学
1987.01.14	朝刊	高校中退再び増加 60 年度は過去最高_高校

1987.01.14	朝刊	(表) 高校中退の推移_高校
1987.06.23	朝刊	背景に不本意入学 高校中退者 文部省が初調査三人に一人「高校生活合わぬ」高校中退
1987.06.23	朝刊	(グラフ) 高校をやめた理由_高校中退
1987.06.23	朝刊	中退防止で文部省方針 高校留年認定、弾力化を指導_高校中退
1987.06.23	朝刊	高校中退—その実情 挫折感・学力不足深く 早い学校への見切り_高校中退
1987.06.23	朝刊	中退→大検が定着 年14%増 合格者の6割に_高校中退
1987.06.24	朝刊	高校中退は本人が悪いのか_社説
1987.07.10	朝刊	もの足りぬ高校中退調査 その後の生活面の変化にも目を_論壇
1987.08.06	朝刊	志願者最高の大学入学資格検定 高校中退深刻化と重複 いびつな学校教育反映_高校
1988.02.14	朝刊	北海道の北星学園余市高 高校中退者も引き受けます_私立高校入試
1988.03.30	朝刊	高校中退者いぜん11万人 61年度の文部省調査_高校
1988.04.26	朝刊	高校中退、息子の場合_ひととき
1988.05.09	朝刊	高校中退者の道閉ざすな 北星学園余市高のささやかな挑戦_論壇
1988.10.12	朝刊	高校中退者横ばい、都立全日制1校平均19.5人定時制、私立は漸減
1989.03.24	朝刊	高校中退し社会に出た娘 母から激励の「蛍の光」ほか_小さなかけ橋
1989.05.05	朝刊	「高校をやめたいと思った」4割_高校
1989.07.19	朝刊	登校拒否 高校中退 対策に専門家会議 文部省やつと本腰地域協力模索 8地区組織作り
1989.07.22	朝刊	登校拒否文部省の新対策 地域の核になる「会議」各地に 学校自体の息苦しさどう解消
1989.08.12	朝刊	高校中退の原因先生にもあるよ 教研集会で報告 神奈川 きつい声、声
1990.01.13	朝刊	受け入れた高校中退生徒 大学へ推薦入学続々 北星余市高_教育90
1990.03.16	朝刊	高校中退11万6千人に 88年度3人に1人「進路変更」_高校
1991.01.09	朝刊	高校中退、中学浪人の進学・就職を考えるつどい_教育
1991.02.08	朝刊	高校中退12万人超す 89年度 公立校で増加目立つ_高校
1991.02.15	朝刊	高校中退12万人と先生_社説
1991.02.17	朝刊	「高校中退者110番」の輪広げよう 岡山の塾経営者が呼びかけ_教育
1991.07.23	朝刊	大検志願、1万9千人超す 7割が高校中退者 文部省調査_大学入試
1991.09.07	朝刊	これから、どう生きるか 高校中退者へ「ガイド」発行「青年舎」_教育
1991.10.01	朝刊	高校中退 目立つ都立 少ない私立 昨年度は5656人記録 都立全日制
1991.12.20	朝刊	高校中退を考えるシンポ 24日、東京・千駄ヶ谷_育児・教育
1992.01.15	朝刊	昨年度高校中退12万人「進路変更」が4割_高校
1992.01.16	夕刊	生涯学習で社会と環流を 高校中退問題の解決策展望_寄稿

<sup>iii</sup> 北星学園余市高校は1965年創立当初から存続が心配される高校であった。地元商工会や余市町の誘致により設立され、開校の年は200名の定員確保できるも、以後は慢性的定員不足が続いた。1988年1月開催の第47回教師研修会では、理事会の示す廃校案を受け入れるか否かの研修となった。存続する唯一の方法として全国からの中退者等を受け入れ特化し存続を検討することになった。内部からは「中退者の大半は暴走族など、暴力的で指導できるものではないのではないか」との意



見もあったが、直近で受け入れた生徒に対する評価は良好であり、やり直しを決意してくる生徒を受け入れる方向で決定した。詳しくは「学校の挑戦」北星学園余市高等学校編，教育史料出版会，1997.

- iv 高校に行き直す以外の方法として、高卒認定試験（旧大学入試検定）がある。2005年から実施される。大検からの主な変更点として、受験科目は8科目から10科目程度。家庭が受験科目から無くなり、英語が必須へ。通信制や定時制の高校に在学している場合は、合格科目が、単位として認められる（各高校の判断）。高校により違いはあるが、高校1年を終了した場合は、およそ5科目が免除となる。この場合は、受験科目は3科目程度でよい。例年8月と11月の2回実施される。16歳以上であれば、全日制に在学していても受験可能。2016年の第2回目試験の合格者は、4,440人であった。年齢別の内訳では、16～18歳（2,350人）、19～20歳（691人）21～25歳（489人）、26～30歳（349人）、31～40歳（426人）、41～50歳（106人）、51歳～60歳（23人）、61歳以上（6人）である。（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/28/12/\\_icsFiles/afieldfile/2016/12/02/1379876\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/12/_icsFiles/afieldfile/2016/12/02/1379876_01.pdf)）.2020.10 閲覧。
- v 紹介された答申等については、「大学入学資格検定及び中学校卒業認定試験の受験資格の弾力化について」生涯学習局生涯学習振興課初等中等教育局高等学校課（1999.7.8）。「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」中央教育審議会答申（1991.4.19）。「大学入学資格検定の改善について」文部省生涯学習局生涯学習振興課（2000.8）などである。
- vi 中退者の受け入れは、定時制よりも、通信制が顕著である。かつて、通信教育は1948年に開始されるが、順調ではなかった。1955年に通信教育のみで、高卒が可能となった。その後、1989年に修業年限は4年以上から、3年以上へ緩和され卒業できるようになった。2004年には、株式会社立通信制高校が許可される。生徒の住所地が3県以上になる場合は、広域性通信制高校となる。その他には、技能連携校、協力校、サポート校などがある。詳細は手島（2017：32-37）を参照。
- vii 中途退学率は、在籍者数に占める中途退学者数の割合である。本調査は平成16年度までは公私立高等学校を調査。平成17年度からは国立高等学校、平成25年度からは高等学校通信制課程も調査対象となる。なお、総合学科は従来の普通科でも専門科（工業・商業・農業）でもない。第3の学科として平成6年度から制度化された新しい学科となる。
- viii <https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf>.116-125 表1は117より作成 .2020.11.1 閲覧
- ix 1980年代まで、学校・企業・家庭の三位一体による生活保障が機能してきた。三位一体による生活保障とは、新規学卒者の一括採用等の特徴とする日本型経営・雇用により学校から企業・職業への「間断のない移行」（中村2014）が安定した雇用を保証してきたことである。しかし1990年代以降、日本型生活保障システムは揺らぎはじめ、非正規雇用の割合は1984年（15.3%）から2017年（37.3%）へ増加している（総務省統計局 労働力調査）。
- x 定時制課程が発足したのは1948年であった。この時期、日本は敗戦の直後で、まだ復興の目途さえつかぬ状況にあり、経済的にはきわめて困窮していた。しかし、学ぶ意欲を持った生徒は多く、後期中等教育を受ける機会を保障するために定時制課程は設けられ「義務ではないが、全日制へ進まないすべての者がこれに進学することが望ましい」とされていた。定時制教育に対し、国側で支援した2つの施策とし、①「高等学校の定時制教育及び通信教育振興法（1953.8）」②「夜間課程を置く高等学校における学校給食に関する法律（1956.6）」がある。①では積極的に定時制通信制

教育振興に乗り出し、定通関係予算を増大し各都道府県への行政指導が行われた。また、定通教育に従事する教員を確保する目的から「定通手当（1960）」を支給することで定時制高校の教員確保や充実を目指した。②では、脱脂ミルクの無償給食（1961）、小麦粉 65g の無償給食（1962）が実施され、生徒の健康増進に寄与し安心して学べる環境を目指した。

<sup>xi</sup> 松本は、1982 年から 1985 年までの、中退者数の推移を示した。その特徴とし、中退者が 10 万人から 11 万人のレベルで推移していること。中退率は、学校ランクに対応し、全日制よりも定時制が、公立よりも私立が、普通科よりも職業科が、高い中退率をみせていること、を指摘した。このような状況に対し、『さまざまな対策が講じられているが～（中略）～問題は慢性化している』と、厳しく批判している。

## The Reality of High School Dropouts and the Conditions of Relearning — Examination by Life History of Dropouts —

MISHIRO, Yosuke

The purpose of this paper is to identify the conditions that made it possible for those who entered high school to fail and drop out, but return to high school. A life history analysis was employed to collect and analyze data. Until now, it has been vaguely stated that dropping out of high school is a disadvantage. But if the students themselves are willing to take a serious look at their own lives and actively try to modify their course of action, it's not really a problem.

Although the issue of high school dropouts received a certain amount of attention in the 1980s, it was not treated as a social issue, but in the 2000s, the difficulties surrounding young people as a whole became a social problem and the need for support for young people became increasingly recognized. This paper follows up on the experiences and interactions with others from before high school to after leaving school.